

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 80 号

2018 年 9 月

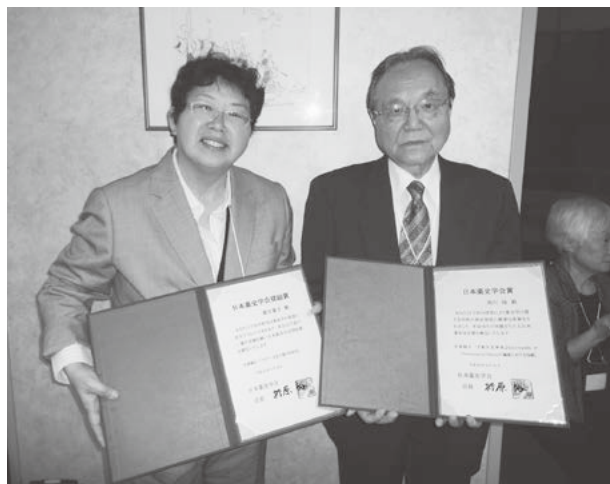
日本薬史学会の学会賞、奨励賞の受賞者

日本薬史学会編集委員会委員長 小清水敏昌

本年4月14日の総会において、本年度の学会賞が西川隆氏（前常任理事）に、奨励賞が夏目葉子氏（評議員）に授与されました。本学会の発展のために寄与し、顕著な業績のある会員が選ばれる名誉ある賞です。受賞者に推薦されると、選考委員会において慎重に選定され理事会にて承認されます。最初の学会賞は2006年に行われ宮崎正夫先生が受賞されました。

なお、上記のほかに「特別賞」がありますが、今回該当者はいませんでした。

以下は、受賞された方々の喜びのことばです。



日本薬史学会賞を受賞して

西川 隆

この度は、「『薬学史事典』(Encyclopedia of Pharmaceutical History)の編著に対する功績」で2017年度の「日本薬史学会賞」を戴き有難うございました。私のような二次資料が頼りの薬史研究者にとりまして、このような大きな賞が戴けるなど考えたこともありませんでしたので身に余る光栄です。

とは申せ、私一人がこの賞を戴いてよいのだろうかという気持ちも正直あります。880ページの『薬学史事典』は私一人の力で到底できる筈がないからです。奥田潤先生をはじめ編集委員の諸先生、ならびに80余名の執筆者のご協力のお蔭で出来上がっ

たものです。改めてご尽力を戴きました諸先生に感謝申し上げます。

今回の私の貢献が多少なりとも日本薬史学会発展の一助となれば、これに勝る喜びはありません。これからも学会発展のために微力を尽くしたいと思っています。

私が薬史に興味を抱いた切掛けは、村山義温学長の「薬化学史雑話」の講義でした。昭和32年(1957)東京薬大3年の時です。選択科目でしたが、「薬学では過去の来歴を顧みない場合が多い。これを改めて薬化学史という題で講義をする。先人の業績につ

いて歴史的考察を加えることは重要」というのが先生の第一声でした。

半年間で何回受講したか覚えていませんが、講義は一般化学から薬化学への関連、さらにビタミン、ホルモン、化学療法剤、アルカロイドなど主要薬品を歴史的に詳述されたのを記憶しています。なかでも「わが国薬化学の発祥」と「わが国製薬事業の発端」は、先生が東京帝国大学の学生および下山・朝比奈

両教授の助手時代の実体験に基づくもので力感ある講義でした。特に第一次世界大戦により医薬品不足に陥った時、国産化を衛生試験所製薬部長として指揮し、危機を乗り切っただけに臨場感溢れるものでした。

今も、薬史に誘ってくれた原点のガリ版刷りの村山義温編「薬化学史雑話」を大切に保存しています。

古代インドの薬学を研究して

夏目葉子

この度、2017年度学会奨励賞を賜りました。2005年から、インドの薬学史を研究しています。研究を始めた当時、私は、ニューデリーに居住しておりました。

奥田 潤先生の勧めもあり、まず、G. P. Srivastava 著、*History of Indian Pharmacy* の翻訳を試みました。この本には、インドの歴史やアーユル・ヴェエダに関する用語が多く記されており、当初は内容を理解することができませんでした。しかし、そこには、*Bower Manuscript* という語が頻出しており、この写本が、古代インドの薬学を理解するための鍵となるものではないかと着想するに至りました。そ

こが、『バウアー写本』の薬学的研究の原点です。

この研究を進める過程においては、多くの方々による無私の支援がありました。したがって、今回の受賞は、研究に携わって下さったすべての方々のご尽力によるものです。サンスクリット語で書かれた『バウアー写本』の解説は、9年目に入り、写本全体の4割を読み終えたところです。これからも写本研究を続け、そこから得られた知見を発表していきたいと考えております。

最後になりましたが、私の論文をお読みいただきました日本薬史学会会員の諸先生方に、深くお礼申し上げます。

第11回柴田フォーラム報告

柴田フォーラム委員長 船山信次

日本薬史学会主催の「第11回柴田フォーラム」が、2018（平成30）年8月4日（土）に東京大学大学院薬学系研究科 南講義室（〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1）にて開催された。出席者は24名であり大変に活発な質疑応答がなされ、有意義な時間となった。出席された方々に厚く御礼申し上げる。

開会に先立ち、船山委員長の挨拶の後、2つの講演がなされた。その第1席は、先の東日本大震災による大津波にて、宮城県亘理町の御実家に所蔵されていた各種の貴重な書画類が被害を受けた江戸清人先生のお話し、そして、第2席は、内藤記念くすり博物館の学芸員である稲垣裕美先生の博物館資料についてのお話しである。

私たち薬史学に興味を持つ者は必ずや種々の資料に接することになるわけであるが、今回は、これらの資料とどのように向き合っていくかということについて知ろう・考えようという趣向である。

今回の御講演を拝聴し、あらためて「記録に残すこと・記録を残すこと」の重要性を認識させられた気がする。

■講演1 豪商の収集した『江戸清吉コレクション』
一文豪の自筆原稿と往復書簡のこれまで
とこれから
江戸清人先生(第六代目江戸清吉 帝京大
学薬学部前教授)

宮城県南部の海岸沿いにある^{わたりちょう}亘理町の豪商江戸家(近年には江戸薬局も経営)の土蔵に伝わった「江戸清吉コレクション」は、明治から昭和までの小説家、劇作家、詩人、歌人、政治家といった著名人の原稿、書簡、額装、軸装、屏風などから構成されている。

この「江戸清吉コレクション」(以下コレクション)は2011年(平成23年)3月の東日本大震災における大津波によって多大な被害を受けた。この結果、第六代目江戸清吉の立場でもある江戸先生は期せずして、このコレクションの修復・保管などに関わらざるを得ないことになり、必要に迫られて最近では学芸員の資格取得も目指しておられるとのこと。

初代の江戸清吉にあたる江戸清治は、江戸人形町(現在は東京都中央区)の呉服屋の長男として生まれたが、実母の死後、仙台(当時は仙臺と記載)、さらには現在の亘理荒浜に移り住み着いた。その娘は官軍が浜通りを北上した折、阿武隈川河口で様々なものを売り、商売上手であったと伝わっているという。また、三代目の江戸清吉は荒浜村の村長を務めていた。しかし、詳しいことは子孫にも不明なことが多々あるとのこと。コレクションの主な収集者は四代目江戸清吉の江戸慶三郎であった。彼は当時の仙台二中(現・仙台二高)の2回生であったがその後の経歴は不明である。

今回のお話しの「江戸コレクション」の存在が最初に一般に知れ渡ることになったのは1978年(昭和53年)6月に起きた宮城県沖地震であった。その際、当時の宮城教育大学の金沢則夫教授が「江戸コレクション」の目録を作成したが、その中には、竹久夢二や夏目漱石、木下杢太郎、森鷗外などの作品や書簡などがあり、貴重な資料の宝庫であることがわかった。そして、さらには、2011年3月11日(金)14時46分に発生したあの大地震

後に発生した大津波により、コレクションは甚大な被害を受けたのである。大津波の被害は2階建て家屋の2階の床まで至り、コレクションが保管されていた家屋(蔵)は「全壊」判定となった。

震災発生後2ヶ月して、宮城資料ネットのレスキュー活動と文化庁の指揮によるコレクションのレスキューが実施されたが、海水を被った資料にはすでにカビが生えたりし、その修復は素人の手にはおえないことが明らかであり、また、今後の保存が不安となった。現在、このコレクションは宮城県亘理町立郷土資料館悠里館(常磐線亘理駅傍)に保管されており、春と秋に定期的特集を組み展示されている。例えばこの春には、平成30年2月17日(土)～3月18日(日)にかけて「文豪たちの筆跡～江戸清吉コレクションの原稿・手紙・短冊」が企画展として開催された。

今後、「江戸清吉コレクション」の登録商標申請や、コレクションのデジタル化、財団法人設立計画、江戸先生御自身の学芸員資格の取得などをひとつひとつ解決していきたいと考えておられるとのこと。価値のある「お宝」であるだけに、個人で管理することの大変さが感じられた。また、江戸先生は、いずれにせよ、個人での博物館の運営は極めて困難であると締めくくられた。

■講演2 内藤記念くすり博物館の資料および図書の収集・保存・活用
稲垣裕美先生(内藤記念くすり博物館学
芸員)

内藤記念くすり博物館は私たち薬史学を標榜する者にとっては必ずや知っている存在であるが、今回、この博物館の学芸員の稲垣裕美先生をお招きして、この博物館の概要と今後の展開などについてのお話をうかがうことになった。

内藤記念くすり博物館(以下くすり博物館)は1971年(昭和46年)に、エーザイ(株)の創業者で内藤記念科学振興財団の創設者である内藤豊次氏によって開設された。展示館、薬用植物園、図書館を併設する医薬の歴史や文化に関する資料や書籍を集めた総合的な薬の博物館である。

その設立の目的としては、設立趣意書によれば、「今日の薬学および薬業の姿は、現在までどのような経過をたどってきたか、さらに将来はどうあるべきかを、学会や業界はもちろん、ひろく一般の人々にも正しく理解してもらうためであります。(中略)実物、標本、模型、写真などを整理して展示し、判りやすく解説して、健康科学ならびに健康産業について、その知識の普及と向上をはかりたいと念願しております。(中略)考古学的に片寄ることなく、テーマを選んで展示し、一般の人びとに薬学および薬業についての知識の普及向上をはかるばかりでなく、専門家にもその調査研究の場を提供しようとするものであります」とあるという。現在の資料数は約65,000点であり、このうち約19,000点が近代化産業遺産として認定されたという。その中には国産ペニシリンである「碧素」の現在ただ1本だけ残っているアンプルや、大正時代の救急箱、さらには江戸時代の陶製蒸留器である「らんびき」などがある。

現在、これらの資料のデータベース化も進められているが、当初使用していたパソコンの容量が小さかったことなどから、データ内容が簡略であり、またデータ同士の紐付けがなされていないなどの問題もあるとのこと。

私たちはこれまでも私たちの身の回りにあるありふれたものほど残してこなかったことを痛感しているはずである。例えば江戸時代に使われた下駄や箸のようなものである。だからこそ、これらのいわば雑貨を大切に保管して母国に持ち帰っ

た当時のお雇い外国人たちのコレクションが、現在は、我が国の当時の一般生活を知る上でとても重要な第一級資料となっている。

稲垣先生は近年、科学史への関心が高まっていることはとても良いことだとしておられ、「人と薬の歩み」のような分野がとても大切であることを強調された。なお、企業に属する博物館としては、例えばオブジーボのような注目すべき医薬品でも、他社の医薬品の場合には、展示したいと思ってもなかなか難しい側面もあることもお話しされた。

くすり博物館においては、研究者への画像貸出などのサービスもしているという。小生は、くすり博物館の蔵書の基礎となったという故・清水藤太郎先生が寄贈された約6,000冊からなる平安堂文庫をぜひすぐにも拝見したくなった。

柴田フォーラムの後、17時より薬学図書館1階ロビーにてビア・パーティが開催された。船山委員長長の司会により、今回も御参加くださった、清水藤太郎先生ゆかりの平安堂薬局顧問清水真知先生(清水藤太郎先生のお孫さんの奥様/NPO法人薬剤師と薬局活動ネットワーク理事長)とともに出席されていた同法人理事の小泉元(はじめ)先生の乾杯の音頭にて和やかな歓談の始まりとなった。楽しい歓談が続いたためか、あっという間に予定時間が過ぎてしまい、日本薬史学会会長の折原裕先生のご挨拶にて中締めとなった。猛暑の中、そしてお忙しい中、ビア・パーティにも御参集してくださった皆様様に感謝申し上げます。

日本薬史学会2018年会(新潟)のご案内

年会長 寺田 弘(新潟薬科大学)

【日 時】

2018年10月27日(土)
10:00～(受付開始 9:30)

【会 場】

新潟日報メディアシップ2階 日報ホール
〒950-8535 新潟市中央区万代3-1-1
URL: http://niigata-mediaship.jp/facility/f03_hall/

【参加費】

- ・会 員：
事前登録4,000円、
当日登録5,000円
(学生会員 無料)
- ・非会員：
当日登録6,000円(学生非会員1,000円)



・情報交換会：5,000円（学生 1,000円）
※非会員、学生非会員は、当日登録のみです。ご了承ください。

【学術研究発表】口演及びポスター

【特別講演】

「サルファ剤：忘れられた奇跡とその影響」：
小林 力（日本薬科大学教授）

【特別講演・公開市民講座】（非会員の方の参加も歓迎）

「良寛さんに学ぶ－心身医学の立場から－」：
櫻井浩治（新潟大学名誉教授）

【情報交換会】

日 時：2018年10月27日（土）
メディアシップ6階 18：00～

【良寛の里ツアー】（非会員の方も参加できます）

日 時：2018年10月28日（日）
9：00～16：00

参加費：10,000円

※2018年会の詳細は、日本薬史学会ホームページ
をご覧ください。

中部支部だより

2017年度 日本薬史学会・中部支部報告

中部支部長 河村典久

下記の通り、中部支部例会・講演会を開催しました。講演要旨などは以下の通りです。

日 時：2018年2月10日（土）

場 所：金城学院大学・栄サテライト

講演会：14：00～16：00

【演題1：「毒物と解毒薬」】

稲垣裕美、森田 宏（くすり博物館）

毒物と解毒薬に関するくすり博物館所蔵の資料の紹介と、資料にまつわる解説。

【演題2：詹糖香について】

指田 豊（東京薬科大学名誉教授）

詹糖香は「神農本草経集注」（502-536）に初出し、「新修本草」（659）には“詹糖樹は橘に似る。枝葉を煎じて香と為す。砂糖に似て黒い。北ベトナムと広東、広西以南に出ず”と書かれている。その後の中国の本草書はこれを踏襲するだけでどのような植物かは長い間不明であった。

中国最初の本格的な植物図鑑とされる「植物名実図考」（1848）の詹糖香の図と説明はクスノキ科のカナクギノキを指していると思われる。また、近年出版された「中薬大辞典」（1977）、「中華本草」（1999）、「中国植物誌」（-2004）、「はいずれも詹糖香にカナク

ギノキをあてている。

日本でも六種の薫物のひとつである「梅花」になくはならないものであったが、平安後期には輸入が途絶え、その復元が望まれている。

そこで、「新修本草」に準じてカナクギノキの茎葉の煎液を濃縮したところ、シャム安息香、蘇合香に似た香りのする十分薫物に使えるものが得られた。しかし、詹糖樹をカナクギノキとする根拠はどの文献にも書かれておらず、カナクギノキの特徴や産地などに本草書と一致しない点もある。更なる文献調査と他の可能性のある植物の探索を続ける予定である。

【演題3：平田眠翁の因伯産物薬効録について】

中島路可（鳥取大名誉教授）

平田眠翁（1807-1882）は鳥取藩の生んだ本草学者であり医師でもある。幕末から明治維新にかけての動乱期のためか度重なる災害（大洪水；大正元年、及び7年、大地震；昭和18年、による山崩れ、大火災；昭和27年）のため資料が失われ不明の部分が多い。

眠翁は数多くの著作を残したのにそのいずれもが手稿本であるため、その存在を知られずに終わっている。平田眠翁について科学史の立場から正しく評価するための調査を行った。

眠翁の手稿本

因伯産物薬効録	(万延元年、	(1860)	国会図書館、杏雨書屋
物名類聚和訓抄	(嘉永6年、	(1853)	国会図書館
薬品発蒙	(嘉永7年、	(1854)	杏雨書屋
校正薬品手引草抄	(文久3年、	(1863)	杏雨書屋
薬性提綱3巻	(嘉永2年、	(1849)	杏雨書屋
生理医学須知			個人蔵
薬品培養禁宣下種採取時郎懐中鑑			”
本草疑事質問録			”
本草主治要略			”

眠翁の手稿本、因伯産物薬効録の諸版の異同を明らかにし出版に関わった。また眠翁の没年の確認、薬草園の位置、住居の場所、眠翁の家系の調査を行った。

2018年度事業計画

2019年2月に例会と講演会を予定しております。ご講演をお待ちしております。

新企画！ 「海外の薬史学会のいま」

国際委員会 宮崎啓一、森本和滋

本年3月下旬、“ISHP Newsletter 19, 2018”が、国際薬史学会 (ISHP : the International Society for the History of Pharmacy) のHPに掲載されましたので、日本薬史学会国際委員会から内容の概略について報告します。カラーの写真が多数掲載されておりますので、ご興味のある方は、英文版を日本薬史学会のHP¹⁾からご覧頂けます。今後は「薬史レター」を通し会員へ発信します。

1. ISHP新会長就任

Axel Helmstädter新会長は、前会長 Christa Kletter 教授の後を受けて、2018年1月に就任した。なお、新会長は Goethe-Universität Frankfurt の教授である。

2. 各国からの報告

(National News for International Use)

2.1 世界各地からの活動報告

オーストリア、ベネルクス、チェコ、フランス、ドイツ、ハンガリー、イラン、イタリア、日本、ポーランド、ルーマニア、セルビア、スウェーデン、ス

イス、トルコ、英国、米国の順で紹介されている。特に、第43回国際薬史学会 (ICHP) が、2017年9月12日 - 15日ワルシャワ大学図書館で開催されたホスト国、ポーランド共和国の報告では、ポーランド薬局方が出版200年目に当たるタイムリーな年度であったこと、18名のヒストリアンが会をICHPの成功に導いたことが最初に記されている。

2.2 我が国に関する活動報告

2.2.1 日本薬史学会(JSHP)会員の国際賞受賞

2017年8月11日、本会会員の順天堂大学名誉教授酒井シヅ氏がドイツ、キールにおいて開催された The 9th International Congress on Traditional Asian Medicines (ICTAM IX, Kiel, Germany) において、Judith Farquhar博士より Basham Medal 賞を授与された。酒井氏のこれまでの多くの業績に対して Arthur L. Basham Medal が授与されたことは、私ども JSHP として誇りに思っている。

2.2.2 The 43rd ICHP (Warsaw, Poland) にて招待講演

2017年9月13日、JSHP前会長である津谷喜一郎氏 (東京有明医療大学保健医療学部特任教授) が、The

43rd ICHP (Warsaw, Poland)にて招待講演にあ
たられた。津谷氏の演題は“The 131-Year History
of Japanese Pharmacopeia : From Westerns
Adaptations to Internationally Harmonized
Regulations”であった。

3. 2019 ICHP の案内

第44回国際薬史学会は、AIHP (American Institute
for the History of Pharmacy) がホスト組織にな
り、ワシントン D.C. で、2019年9月5～8日に開催

される。会議のテーマは、「薬剤師と医薬品の品質
(The Pharmacist and Quality Medicines)」である。
また、本会議の開催にあたっては、米国薬局方 (the
United States Pharmacopoeial Convention (USP))
が支援し、ワシントンのダウンタウンのキャピタル
ヒルトン(The Capital Hilton)を会場とする。日本
薬史学会の会員の方の多くの参加と発表を期待しま
す。

1) [http://histpharm.org/wordpress/wp-content/uploads/
2018/03/ISHP-Newsletter19.pdf](http://histpharm.org/wordpress/wp-content/uploads/2018/03/ISHP-Newsletter19.pdf)

〔Book紹介〕

加藤茂孝 著

「続・人類と感染症の歴史—新たな恐怖に備える—」

A5版 225頁 2,200円 (丸善出版)

本書は、2018年5月刊行された。その帯には、「風
疹研究を牽引してきた加藤茂孝が語る。起こり得る危
機に備えるために—歴史に学ぶ」と紹介されている(写
真)。

第1章は、「2014年夏」のタイトルで、「なぜ2012～
2014年に、風疹流行と CRS (先天性風疹症候群)発生
か?」。その答えは、1977年の我が国の風疹ワクチン接
種が、米国方式ではなく英国方式を選択したことから
遡る。即ち男子中学生世代(2013年時点の35～51歳)
は、風疹に対して免疫を得る機会が無いまま成長し、
2013年の風疹流行の中心を担ってしまったことを明快
に解説している。

突如出現して人類を震撼させた「AIDS」(第2章)、
第3章「ハンセン病—苦難の歴史を背負って」のⅦの治
療薬の発見には、石館守三博士のプロミン合成のスト
ーリーが58ページに記されている。

また、50万年にわたって人類を苦しめている「マラ
リア」(第5章)、コロンブス時代、新大陸に発見を機に
世界に広がった「梅毒」(第6章)、江戸時代の日本では、
“虎狼狸(ころり)”と恐れられた「コレラ」(第7章)、「エ
ボラ」(第8章)、そして「SARS」(第9章)が取り上げら
れている。第10章「常に備えを」210ページには、米国の
ACIP (予防接種諮問委員会)の先行的な組織とし



での効果を紹介し、我が国にも、公的ではあるが、行
政機関とは独立した委員会の設置の必要性を強調され
ている。

既刊の「人類の感染症の歴史—未知なる恐怖を超え
て—」(2013年3月刊)の天然痘、ポリオ、結核、インフ
ルエンザ等とセットで通読すると感染症の歴史全貌が
より広範囲に理解できると考える。

本書は、人類と感染症の歴史を深く理解するのに有
用なバイブル書となる事が期待される。

(森本 和滋)

薬史往来 キャンパス・ツアーで学ぶ薬学史

東京薬科大学薬学部 客員教授 宮本法子

「歴史から学ぶこと」は極めて重要なことである。しかし、学生に薬学の歴史をどう教えていけばよいのか、悩むことが多かった。

薬学の創始者など歴史上の人物の話や医薬分業制度、一般用医薬品販売制度、学校薬剤師設置までのそれぞれの歴史、さらには薬害の被害を余儀なくされた当事者の方々を講師としてお招きし、歴史から何を教訓として学び取ることができるのか、試行錯誤しながら講義を準備していた。ただ、大人数のシャワー式の講義の限界を感じることもあり、もっと面白い試みはできないものか考え続けていた。

ある日、筆者の担当していた「薬学と社会」の講義で、本学のキャンパスを回って、歴史上の人物や古い実験器具などを探してくることを提案した。

東京薬科大学は、1880年藤田正方先生により創設され、私立薬系大学の中で最古の歴史を有しており、本学の歴史を実際に感じ取るとは、我が国の薬学の歩みを知ることにつながることを考えたからである。

1週間後、本学創始者の藤田正方の碑や下山順一郎、丹波敬三、池口慶三、村山義温の胸像、さらには古い生薬の標本や顕微鏡、天秤などを見つけたと学生たちは嬉々として報告し合った。これまで通り過ぎてきた胸像の人物が、本学のみならず日本の薬学の創始者であったことに驚いたようであった。

筆者自身にも大きな発見があった。医療薬学棟の入り口の壁にギリシア神話に登場するような大きな彫像を見つけたのである。それは健康の女神ヒュゲイアに違いなかった。ギリシア神話で、医神アスクレピオスの持っている杖に蛇が巻き付いている像はよく知られているが、娘ヒュゲイアも杯と蛇を持っている。この「聖杯と蛇」は薬学のシンボルとして世界で多く用いられており、ヒュゲイアは、ギリシア語で健康を意味し、英語の hygiene (清潔、衛生) の語源とされている。

ヒュゲイアは、健康を守る神である。学生たちに薬学の原点を伝えることができたことを幸運に思っている。

編集委員会からのお知らせ

本レターが80号を迎えました。この経緯をみると学会誌の発行のほかに、会員相互の交流と研究意欲を活発にするためとして「薬史学会通信」を新たに発行したのが1985年10月。現在の名称「薬史レター」となったのはNo.42号からで2006年3月のこと。以前は年複数回の発行でしたが、財政上から今は年2回に減少。学会誌とは異なり本紙には気楽に投稿していただき会員に対し参考になる情報等を提供したいと考えています。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：小清水 敏昌

編集委員：荒木 二夫 久保 鈴子 齋藤 充生

薬史レター 第80号 2018年9月

編集人：小清水 敏昌 発行人：折原 裕

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局)

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>